

KANTO

GLOCAL

グローバル関東

Vol.3 January 2010

Special Features

山と生きる山梨





グローバル関東

Vol.3 January 2010

CONTENTS

- 02 MESSAGE **山梨の魅力**
- 04 座談会 **富士山との共生**
- 12 特集1 **リニア中央新幹線の実現に向けて**
- 14 特集2 **山の暮らしを守るために**
- 16 特集3 **二地域居住を通じた地域づくり**
- 20 特集4 **鉄道トンネルをワインカーヴと遊歩道
に再生 近代化産業遺産を活かしたまちづくり**
- 22 坂東の原風景
- 24 LOHASな土木
- 26 業務インタビュー 技術人に聞く
- 28 関東支部活動紹介／事務局だより
地域委員会だより／編集後記

YAMANASHI COEXISTING WITH MOUNTAINS

山と生きる

特集

Special Features

山梨

山梨県は四方を山で囲まれており、富士山をはじめ南アルプス、八ヶ岳、奥秩父などを擁する日本でも有数の山岳県である。これらの山々の中には、家族でハイキングなどが楽しめる身近な山から、本格的な登山を楽しむことができる山まで多種多様な山がある。信仰の対象から観光資源へ。山とともに暮らしてきた山梨県と山とのつながりをテーマに、山梨県の魅力に迫る。

山梨の魅力

信州大学 副学長 笹本 正治

私が生まれたのは甲斐市のもっとも北側、神戸という集落です。神の戸の文字からすると、金桜神社、あるいは金峰山信仰の一つの参詣道の入口で、外に開かれていた集落名です。甲斐国絵図を見ても神戸集落の前を通る道が小尾村（北杜市）の方向に抜け、信濃国境への関所となっています。山の中からこそ逆に各地につながっていた、それが甲斐なのです。

山梨県と聞くと多くの人は自然の豊かさを前提とし、富士山、富士五湖、昇仙峡、南アルプスなどをイメージするのではないのでしょうか。どちらかというと、閉鎖的な世界だと考える人が多いようです。ところが、盆地であつても山梨県人は日本や世界の情報に常に気を配り、他所に出て活躍する人が多いのです。山梨が誇る歴史的な人物として武田信玄がいます。日本に鉄炮が

伝来したのは天文十二年（一五四三）だとされています。『妙法寺記』という記録によれば、信玄は川中島合戦に際し、天文二十三年に善光寺の西に当たる旭山城（長野市）へ三百挺もの鉄炮を入れていました。伝来してわずか十年程で、信玄は大量の鉄炮を入手していたことになります。戦国大名として生き延び、領国を拡大するためには広く情報を入手し、それにすぐ対応していかなければならなかったのです。

皆さんは甲州商人ということばを御存知でしょうか。江戸時代に広く活躍するようになり、幕末には横浜港開港により織物や果樹など甲州物産の投機で利益を上げました。東京電灯（後の東京電力）などを傘下に置いた若尾逸平、雨宮製作所や日本製粉などの創業者として知られる雨宮敬次郎、東武鉄道や南海電気鉄道に関与し根津財閥を形成した根津嘉一

郎らが有名です。

世界レベルで活躍する人も多くいます。

日本人最初のメジャーリーガーは村上雅則です。サッカー選手として中田英寿を思い起こす人も多いのではないのでしょうか。芸術では現在深沢幸雄がメキシコで版画を描いています。

一方で、俳人として名高い飯田蛇笏・龍太親子などのように、地域にこだわって山梨から世界に発信する人もいます。

山梨が世界に誇るのがミレーやバルビゾン派の絵画で有名な山梨県立美術館です。昭和五十三年（一九七八）に開館したこの美術館は地方美術館ブームの先駆けをなしました。武田信玄が戦争をしなければならなかった理由の一つには、気候異常の中で食糧難になり、他国から略奪してでも領民を食べさせる必要がありました。その流れの中で、戦国時代から江戸時代にかけて新田が開発され、山の上まで棚田が連なる水田の世界に変わりました。幕末から明治期にかけて養蚕がさかんになると、あつという間に桑畑に変わりました。その後はぶどう畑が広がりました。場所によっては桃になつたり、サクランボになつたりと、山梨は果樹王国です。かつての桑畑は影も形もありません。これからどんな風に景観が変貌していくか、楽しみでもあり、怖くもあります。

景観は変化しているのですが、遠くの山の形は変わりません。生まれた故郷というと、目の前に太刀岡山があります。四方が切り立った岩の独特の景観、とりわけ新緑と紅葉の時期は別格です。郷里に帰ってこの山を見る度に、ふるさとの重みとすばらしさを強く感じます。さらに、南には御坂山系を下に置いた霊峰富士、西には日本第二位の高さを誇る北岳をはじめとする南ア



甲斐駒ヶ岳にしずむ夕陽

ルプス、北西には美しい裾野の広がる八ヶ岳、北には五丈岩のある金峰山が、それぞれ個性的に聳えています。中央線で甲斐駒ヶ岳を見ると、いつもその迫力に感動します。

盆地という環境のすばらしさに立脚しながら、常に目を日本に、世界に向けている、心豊かな、チャレンジ精神旺盛な住民がいる。それが山梨の魅力です。

山梨県といえば武田信玄、そんな意識を変えてくれる、新たな誇りとなる人物を持てるようにしたいものです。山梨の本当の宝物・魅力は、未来を背負う子どもたちであり、豊かな人間性を持った県民ですと、心からいえるようになりたいですね。



笹本 正治 プロフィール
(ささもと しょうじ)

一九五一年十二月十九日山梨県敷島町（現甲斐市）生まれ。甲府第一高等学校、信州大学文学部を経て、名古屋大学大学院文学研究科修了。信州大学文学部教授。博士（歴史学）。研究は、武田信玄、音や色に対するイメージの変化、災害史、商人・職人史など多岐にわたる。地域づくりに積極的に参加している。

著書に『戦国大名武田氏の研究』、『蛇拔・異人・木霊』、『真継家と近世の鋳物師』、『中世の災害予兆』、『武田信玄』（中公新書）、『鳴動する中世』、『戦国大名の日常生活』、『山に生きる』、『異郷を結ぶ商人と職人』、『地域おこしと文化財』、『武田信玄』（ミネルヴァ書房）、『実録 戦国時代の民衆達』、『軍師山本勘助』、『天下凶事と水色変化』、『中世の音・近世の音』、『戦国時代の諏訪信仰』、『真田氏三代』などがある。

富士山との共生

怒れる女神を

鎮めるために

今の富士山には火山としての印象はあまりないかもしれませんが、今もまぎれもない活火山であり、かつては、大きな噴火を繰り返していたのです。



インタビュー

清雲俊元 氏

富士山世界文化遺産山梨学術委員会 委員長

聞き手 広報委員会

東洋の考え方の
奥深さを、
世界中の人に
理解してもらう仕事

特に、九世紀には、延暦大噴火、貞観大噴火と二つの大噴火をしています。そうした中、荒ぶる神を鎮めるために、九世紀の後半、静岡や甲州側では富士山麓に、次々に浅間神社のお社が建てられました。

それが浅間（せんげん）明神、浅間（あさま）神社で、いわゆる富士

山の噴火を鎮めるということだったので。その後も噴火を繰り返した富士山ですが、十一世紀頃から、噴火の頻度はかなり少なくなってきました。十二世紀の前半になると、富士山に人々が登るようになり、山岳信仰が入ってきます。

それと同時に密教、後の言い方をしますと真言宗や天台宗になります。が、そういうものと習合して修験道の行場になってくるわけです。

この人たちの拠点になったのが、静岡県の熱海に伊豆山権現、富士山村山修験の祖といわれる末代人がそこを起点にして山頂へ登って、大日寺というお寺がつくられました。

富士山では「八葉の峰」ということが云われます。山の地形がまるで八葉の蓮華の相をしており、大日如来の浄土である胎藏界曼陀羅の中心部である中台八葉院に例えられている、というものです。密教には曼荼羅というものがあって、その中でも胎藏界の曼荼羅は母胎の意とされています。胎藏界の曼荼羅の中心を富士山の中心に見立てたのです。そのため、その一番上は大日堂が建てられたわけです。

富士山の神様が何故女性であったのかというと、噴火のエネルギーが凄まじかった。これを怒れる女性に例えて、富士山の神様は女神とされたと言われています。

修行の場となった

富士山

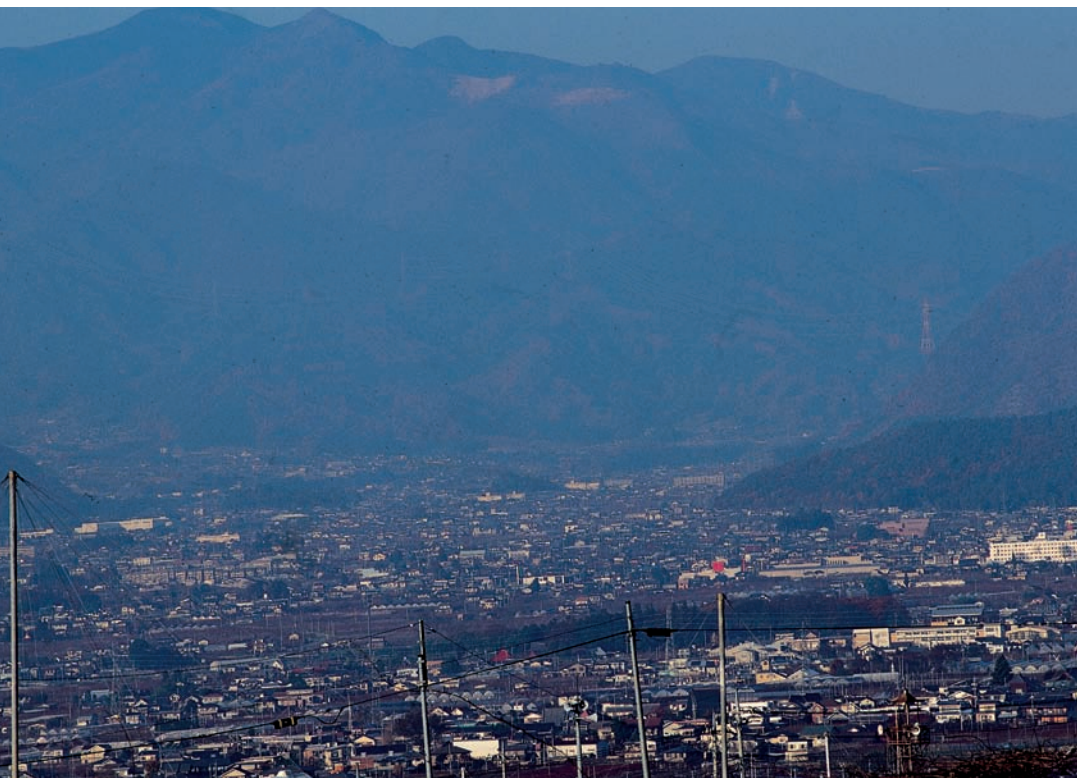
富士山は、標高二五〇〇メートル程から上は、木や林が無くなり、砂礫と岩盤になります。この様子を焼き山と称し、他界、すなわちあの世



■清雲氏が住職をしていた放光寺



■放光寺でのインタビュー



■甲府盆地を塩山方向に望む

に見立てたのです。ですから、富士山に登ることは、あの世に行って帰って来る、と考えられたのです。

富士山は神聖な場所であり、護摩をたいたり、加持祈祷をしたりといった修験の行場となったのです。十六世紀には、白糸の瀧や人穴において修行した長谷川角行から始まったという富士講が盛んになってきます。八海めぐりといって、富士山の周辺をめぐって修行したのもこの頃です。

富士講を支えたのが御師の家です。今でも代表的に小佐野家や戸川家の両家が、国の文化財として、また県の文化財として残っていますが、そういった御師の家が全盛期には八十軒余りもありました。そこに来た人たちが泊まって、講社の先達から登拝のことを聞いたり、教わったり、登拝の案内をしてもらったりしたわけです。

時代は、ちょうど戦国時代から、江戸時代にかけてといった頃です。江戸の町のことを八百八町と言いますが、その八百八町に八百八講も講があったと言われています。もちろん江戸だけでなく、関東一円、今で言えば、千葉や埼玉からも登拝に来たのです。これが富士山の信仰の最盛期です。

しかし、明治維新後は廃仏毀釈により仏教的施設は神道系の施設に再編されたのです。

明治になっても富士講は盛んでし

たが、昭和になって富士スバルラインが完成します。スバルラインを通じて、五合目まで車で行けるようになる。御師の家は途端に減少していききました。

八百八講あった講そのものも、時代と人の移り変わりと共に衰退して、今ではもう数講しか残っていないようです。

信仰の対象で あり続けた富士山

富士山の女神は、木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）と言われていますが、実はそれは、江戸時代に国学者が言い出したことなのです。富士山の女神を古事記や日本書紀に登場する木花咲耶姫とすることは、この時代の国学者の風潮でしたが、女神像であることは古来から変わらなかつたのです。

噴火している時代も、修験が登っている時代も、富士講の人たちが登っている時代も、神様の呼び方が変わっただけで、大昔から女神であったのです。

もつと遡れば、静岡側に千居遺跡があり、そこでは五〇〇〇年も前から富士山を遙拝の対象にしていたとも言われています。

およそ人間が住むようになってから、日本人にとって富士山は、生活の中に生き続けた信仰の対象であつ

たのだと思います。

意識の根底にあるもの

富士山は、日本人の象徴だとか、心のよりどころだなどと皆さんおっしゃいますが、まさにそうだと思います。およそ、子供から年寄りまで富士山を知らない人はいません。

私の子供のときは、山の絵を書けばみんな富士山です。山梨県だからかと思つて、聞いてみますと、余所でもそうだというのです。子供に絵を書かせれば、特に教えずとも、いつの間にかちゃんと富士山の絵を書くようになっていく。

新幹線で走つても、富士山が見えるところに行くと、みんな無意識に富士山の方を見えています。これは子供のうちから自然に備わっているもので、正に文化というにふさわしいものです。

富士山の何が特別なのか、一つは、姿形が良い、ということがあります。外国の方は、富士山というのは本当にすばらしい、でも、あのくらい山は世界にはたくさんあつて、別に珍しいことはないのに、不思議と魅力的な山だと、言います。それこそが自然美、人によつていろいろな表現をしますが、そういう魅力を持っているのが富士山だと思います。

万葉時代から歌に詠まれ、聖徳太子の伝説の中にも登場し、江戸時代

には広重や北斎の絵にも登場してくる。富嶽三十六景も富士山がなければあれだけのものにならなかつただろうと思います。富士山は、日本の文化の根底にあるものであり、文学、絵画、工芸、庭園などの文化を育むものであると思うのです。

初めてのハイブリッド 世界遺産

世界遺産には、「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」の三通りがあります。富士山は、文化遺産での登録を目指していますが、文化遺産は、ICOMOS（国際記念物遺跡会議）が調査報告することになっていきます。

知床を自然遺産として調査報告したのは、IUCN（国際自然保護連合）ですが、それとは別な機関になります。富士山を自然遺産として申請出来なかつた経緯は、一時期報道でもあつたように、開発されすぎていて、ゴミなどで汚れていたためです。

ICOMOSへは、富士山は自然美の中に、信仰と芸術が宿り、日本人の心のよりどころになっているとして申請しています。

ところが、ICOMOSの方達は、富士山を見て、これは世界でも前例は無いが、文化遺産の中に、自然美を含めるべきだ、と言うのです。

そういわれると、複合遺産のように思えますが、複合というのは、自然と文化が両方あるという状態のことなのです。しかし、富士山は、そのものの自然美の中に信仰があり、芸術があるので、複合遺産ではないと思うのです。

これは今まで世界中見渡しても前例の無い話です。前例が無いくらい富士山は素晴らしいものだと評価されている。私はそういう風に受けとっています。高く評価されることは嬉しいことなのですが、自然遺産としての視点も入ってくると、範囲が広がってしまつて、とても大変なのです。

信仰は富士山の背骨

もう一つの難問が、信仰を扱うことの難しさです。

例えば、御来光を拝むというのは、日本人独特の習慣のようです。御来光というのは、まさに信仰の象徴であり、御来光を拝むとはすなわち、宇宙を神格化した神仏を拜んでいるということなのです。

日本人は、富士山に登れば、皆、御来光を拝んでおり、知らぬ間に東洋的考え方をちゃんと学んでいるのです。信仰とは、お寺や教会に行つて、ただ拜んでいることではなく、そのバックボーンとしての思想が大切なのです。日本人は、御来光を拝

む、自然を拝むというものの中に、無意識に自然崇拜とはまた違った意味を持っている。それこそが東洋思想なのです。

しかし、これがなかなか説明出来ないし、理解してもらうのが難しいのです。東洋のもので、タージ・マハルのように建物などを対象にするのでしたら、誰がどういう考えでつくったか、すぐ文章にすることが出来る。しかし、浄土庭園や富士山となると、東洋の思想から説明しなければならぬ。

逆に言えば、富士山の世界文化遺産登録を通して東洋思想が正しく評価してもらえる良い機会にならないかなと、思っています。東洋の考え方の奥深さを、世界中の人に理解してもらおうための仕事、そう理解しています。

苦労する中で、ICOMOSの方々に言われた印象深い言葉があります。「富士山の背骨になっているのは信仰だ」「信仰が背骨になっている。すごいですね。これが一つの証ではないですか」と言うのです。理解して貰えたうれしさと共に、その深さに驚かされました。



インタビュー

荻沼 進 氏

富士山レンジャー
(山梨県観光部 観光資源課 富士山山岳担当)

今では
ゴミはかなり
減少してきています

富士山レンジャー

富士山レンジャーとは、山梨県の観光部観光資源課に属している非常勤嘱託職員で、平成十七年度に二人

で始まり、平成二十年度に二名増員され、現在四名となっています。富士山の環境保全などに専任で当たる県の職員ということで、週休二日でほとんど常勤と変わらない形で仕事をしています。

業務の内容は、富士山の来訪者に

対する利用マナーについての啓発や、富士山の自然についての解説、富士山にある植物や溶岩などの不法採集やごみの不法投棄など、不正行為に対する監視及び是正、指導も行っています。また、登山道にある指導標識や案内標識・案内板などの自然公

園施設の点検も活動の一つです。

活動範囲は、富士山の山梨県側の、主に国立公園である富士山北麓で、夏の時期などは、毎週末富士山に登るなど、ほとんど一日外で活動しています。

冬の時期には、学校などへ出向いて話をする出前講座や、ビジターセンター来訪者への説明などの室内を中心とした教育活動がメインとなります。

ビジターセンターは、県立施設ですが、指定管理者制度を採用していて、建物自体の管理・運営は株式会社富士急ビジネスサポートが行っています。その中に、県の観光資源課と世界遺産推進課の各分室が入っていて、富士山レンジャーも勤務しています。

ビジターセンターの主な役割は、来訪者への観光案内や情報の提供、富士山の環境保全についての情報発信、イベントや啓発などとなっています。

富士山ブーム

ここ最近では主に中国などアジア方面からの来訪者が増えてきています。富士山の五合目の売店の方は流暢に中国語を話したりしていますし、今みたいな冬の時期になると日本人のお客さんがほとんどいないものから、私たちも普通の格好で歩いて



■ビジターセンター



■子供への教育も重要な活動



■富士山を巡回するレンジャーのメンバー

いれば中国語で売店の方から声をかけられたりすることもあります。

五合目までバスで行って、お土産を買って、写真を撮ってというような感じで、実際に登る方は少なかったですが、昨年から中国人観光客の個人旅行が解禁になったこともあって、登る方も見かけるようになりました。

人が多くなるにつれてゴミや溶岩持ち帰りなどのマナーの問題が発生しています。これからは、海外からの観光客の方に対する啓発や外国語でのマナー標識の設置などの対策がより重要になってくると思います。

外国人の増加や、世界遺産登録の動きがあること、山小屋やトイレなどが綺麗になったこともあって、富士山を訪れる登山客は、年々増えています。

富士山は駐車場の台数も限られていますので、夏場などは、スパルラインが渋滞してしまつて、五合目まで行くのに、三、四時間も掛かったり、トイレも処理能力の限界に近くなっていたり、ここ数年はオーバーユーズといえる状況になってきています。

多くの方が富士山に興味を持って、来て頂けるのは大変ありがたいことなのですが、あまり人が多すぎると、せっかく自然を楽しみに富士山に来たのに、東京の真ん中に居るようだった、と体験の質も低下して

しまうと思っています。

今は、日本一高い富士山に登って、御来光を拝む、そのために、五合目まで車で行って、ひたすら山頂を目指すという方が多いのですが、富士山には樹海や鍾乳洞などあまり知られていない魅力がまだまだ沢山あります。もっと富士山での楽しみ方が多様化して、人の流れも分散してくれば、と思っています。

富士山の

お勧めスポット

富士山の山頂以外の楽しみ方としては、やはり樹海や富岳風穴や鳴沢氷穴といった観光洞窟が有名ですが、ガイドが居ないと行けないような場所もあります。行くのは大変ですが、その分、手つかずの自然が残っています。

中でもオススメは、大室山周辺です。富士山は、山頂以外にも周りにも噴火跡があります。大室山はそのうちの一つなのですが、樹海の溶岩が流れる以前からあるので、溶岩が流れたところと、大室山があつて流れなかった場所で植物の生態系がガラッと変わっているのです。

普通、樹海はヒノキなどの針葉樹が多いのですが、大室山の山麓には、大きなブナの木があるなど、開放的な空間になっていて、非常に面白い場所です。



■山麓啓発キャンペーンで活躍するレンジャー



■富士山の自然を解説するレンジャー

また、大室山周辺には、本栖風穴や富士風穴といったあまり知られていない洞窟があつて、これもエコツアーなどの穴場になっています。

富士山の今の姿

活動の機会に、富士山のイメージについて、良い面と悪い面を尋ねると、良い面は、日本一高い、自然がたくさんある、悪い面としては、ゴミがたくさんといった答えが返ってきます。

一時期、富士山にゴミがたくさんあつて世界遺産になれないという報道がされたこともあつて、富士山は汚い山と思っている人が多いのです。しかし、ここ十年ほど、報道の影響もあつて、富士山を綺麗にしようというボランティアやNPOなどの活動が盛んになっていて、今ではゴミはかなり減少してきています。

そういう面では、あの報道は良かったのですが、未だに昔のイメージを引きずって、富士山はゴミだらけ、というような発言をテレビなどでしている方も居るのは、ボランティアの方の努力を目にしているだけに、少し残念に思います。

富士山の自然を守るために

ゴミという面ではかなり改善しているのですが、樹海などを歩くエコツアーの一部で、本来立ち入ってはいけないところに立ち入るというような問題が発生しています。

樹海は、溶岩が流れた上にあるので、余り土が無いのです。その少ない表土に根を張って森になっているので、根を覆うコケが土の役割をしています。それを踏み荒らされてしまふと、樹海の木々にとっては大問題なのです。

そのため、エコツアーをやっている事業者や県で互いに話し合いをして「エコツアーガイドライン」というルールを作って、歩くルートや人数などを定めたりしています。

また、富士山は国立公園の中で、植物や溶岩の採取は禁止されています。ところが、余り知られていないからだと思うのですが、持ち帰ろうとする方がいるのが残念です。

そういったゴミ以外の問題については、ニューズレター等での啓発が重要になってきています。その結果、知らずに富士山の溶岩を持って帰ってしまったので、申しわけないですが、これを返してください、と謝罪の手紙が添えられて、溶岩が送られてきたこともありました。

金峰山からみた富士

私が富士山に初めて登ったのは、四十歳ぐらいのころです。宗派の青年会で、富士山の登拝行をすることになり、私が下見を任せました。下見と本番で、一週間の間に二度登りました。運がよかったのか、二度とも御来光が拝めたのです。そのときに、すごい、という感動と共に、信仰というのはいかに感動から生まれるものなのだな、と深く感じました。

ただ、富士山に関わるようになったきっかけは、一つの素晴らしい景色です。私が住職をしていた放光寺の近くを金峰山から富士山へ向かう昔の道者街道が通っています。金峰山から見る富士山はどんな眺めかな、とずっと思っていたのですが、ある時、金峰山へ登る機会がありました。その時がまた良い天気で、金峰山から見る富士山は本当に素晴らしかった。やっぱり霊峰富士山でした。

今、富士山に登っている人は、御来光を見たくて行くだけかもしれません。でも、登った人は、私と同じように、すごいエネルギーを貰って帰ってくると思います。富士山は、そういう大きいエネルギーを持った山ですね。古から日本人の文化や宗教を支えてきた霊峰です。

心の中に霊峰富士を再び

戦後、日本人は経済優先、効率優先になり、作って、使って、壊れば捨てて、富士山の麓にもゴミを捨てていたのです。それが、ここへきて少し変わってきたように感じています。

清雲俊元 氏

PROFILE

1935年山梨県甲州市生まれ
1958年國學院大學文学部文学科卒業
1965年真言宗智山派放光寺住職、現在 同寺長老。
現在 主な役職
・山梨県文化財保護審議委員会 会長
・山梨郷土研究会 理事長
・富士山世界文化遺産山梨県学術委員会 委員長
主な著書
・富士山 信仰と芸術の源 (共著 小学館)
・山梨県史 通史編 中世 (共著 山梨県) ほか



■金峰山から望む富士山 (三枝仁也氏撮影)

一時期、富士山はゴミだらけと、ショッキングな写真が報道されたので、今でもそう思っている人が多いのですが、それは全くの誤解です。私は三年前に登りましたが、五合目以上にゴミなんて全くありません。頂上で、飴を食べようとしたら、包み紙が落ちた。すると、近くに居た見知らぬ女性がパツと拾ってくれたのです。それくらい登山者にマナーが浸透してきているのです。

これは、世界遺産登録に向けた取り組みが始まったから、という側面もあると思いますが、決してそれだけではないと思います。恐らく、日本人の意識や価値観がここ十年くらいで変化してきているのだと思います。まだ麓には不法投棄のゴミなども見られますが、富士山は、日本人の魂のようなものですから、霊峰富士にふさわしい姿に早く戻って欲しいと願っています。

富士山を世界遺産に、と言うと、富士山は素晴らしいものだから、当然だよ、と皆さんおっしゃいます。でも、何が素晴らしいのか、と聞くと答えられないのです。

私は、ある著名な歴史の先生に「清雲さん、富士山は下手すると上つ滑りするよ」と言われたことがあります。つまり、富士山の表面だけでなく、その内面が持つ価値を正しく理解していく必要性を指摘されたのです。富士山のことは当然みんな知っています。でも、信仰や芸術、文化、歴史のこと、御来光とは何なのか、富士山は何故日本人にとって特別なのか、そういうことは驚くほど知らないのです。

これは、今までいかに富士山を大事にしてこなかったか、という現れだと思っています。これからはもっと富士山のことを皆さんに知って貰いたいと思っています。

富士山との関わりと

知られていない富士山の魅力

私は、平成十七年に大学を卒業して、その年の富士山レンジャーの募集に応募しました。大学時代も山岳部でしたし、富士吉田市の出身ということもあり、山にかかわるような仕事をしたいと思っていました。

もともと私にとって、富士山というのは、生活のごく一部、当たり前の存在でした。でも、富士山レンジャーという仕事を通して、いろいろな人と出会ったり、富士山と関わる時間が増えたりするに当たって、毎日見てきた当たり前の富士山が、実は奥深いものだということに気付かされました。

例えば、私の出身地の富士吉田市は、かつて、御師の家が沢山ありました。言われてみれば、子どものころ、とても立派な庭のある家が多いなと思ってはいたのですが、御師の家だったのです。

最近では、特に富士山の歴史や文化という面に興味を抱いています。自然保護だけを突き詰めると、結局、人が関わらないことになってしまいます。でも、それは違うと思うのです。何故かという点、富士山には人が関わって生まれた魅力も沢山あるからです。それは、歴史であり文化ではないでしょうか。

歴史や文化は、人が関わっていないと消えていってしまうものだと思うのです。私も、富士山の麓で産まれ育った一人の人間として、富士山の歴史や文化というものを学んで、出来るだけ多くの人に伝えていきたいと思っています。

富士山との共生

私もそうでしたが、みなさんにとって富士山は、当たり前のもので、あまり大切にしていなかった。

共生に向けた思い

萱沼 進 氏

PROFILE

1982年山梨県富士吉田市生まれ
山梨学院大学に入学後、山岳部に所属し富士山を始め多くの山に登る。
夏には富士山の登山ガイドを経験。
2005年富士山レンジャーに就任。その後、富士山への興味がさらに深まり、自然環境の保全だけでなく、歴史文化の伝承にも関心を持つ。

ったのではないかと思います。現在の富士山は、誰でも簡単に訪れることができる場所になっています。気軽に来られる反面、ゴミを捨ててしまったり、溶岩を持ち帰ってしまったということが起きています。

富士山は観光資源の一つですが、それも使い過ぎてしまうと、富士山が持っている自然などの魅力を損なってしまいます。富士山を訪れた外国の方は、富士山を日本の顔として見ています。その富士山を守っていくことは、日本人にとって大切なことです。

そのためには、私たち日本人が、富士山の自然や歴史、文化のことをもっと知らなくてはなりません。かつての人が富士山に対して抱いていた畏敬の念や、富士山は特別な山だ、という意識を私たち日本人が再び抱くことが、自然と富士山を大切にしていくことに繋がるからです。



■ビジターセンターでのインタビュー

リニア中央新幹線の実現に向けて

山梨県企画部リニア交通課

夢と希望をのせて

東京オリンピックを目前に控えた昭和三十九年、東京・大阪間を三時間で結ぶ東海道新幹線の開通は、高度



■写真 実験線を走行するリニアモーターカー

経済成長を加速し、日本を大きく変えました。そして今、新幹線の約二倍のスピード「時速五〇〇キロ」を誇るリニア中央新幹線がその実現に向け大きな動きを見せています。

この計画が実現し三大都市圏が約一時間で結ばれると、各地域間の交流・連携が一層強化され、二一世紀の我が国の新たな国土の大動脈として、社会経済を支えるとともに、災害に強い国土づくりに大きく貢献することが期待されます。

この驚異的なスピードを生み出し、エネルギーや環境問題においても優れた特性を有するリニアの歴史は今から半世紀近く前の昭和三十七年、旧国鉄によって始められた超電導リニアの研究開発に遡ります。その後、四八年に東京都から甲府、名古屋、奈良の各市付近を経由して大阪市に至る路線が「中央新幹線」として全国新幹線鉄道整備法（以下「全幹法」）に基づく基本計画に位置付けられました。この路線をこれまでの鉄輪走行ではなく、超電導リニアで整備しようとするものを「リニア中央新幹線」といいます。

これまで、山梨リニア実験線での様々な走行試験や高温超電導磁石等の開発が順調に行われ、現在、既に実用化の基盤技術は確立し、実験は実用レベル仕様の確認などをテーマに最終段階を迎えています。

中央新幹線は、基本計画路線とされた昭和四八年以来、既に三六年もの間その位置付けが変わっていません。今後は、次のステップである整備計画への格上げがいつ行われるかが焦点となりますが、着工までには地形・地質や建設費などの五項目に

リニア中央新幹線着工までの流れ

中央新幹線は、基本計画路線とされた昭和四八年以来、既に三六年もの間その位置付けが変わっていません。今後は、次のステップである整備計画への格上げがいつ行われるかが焦点となりますが、着工までには地形・地質や建設費などの五項目に

リニアモーターカーの歩み

S37	リニアモーターカーの試験研究開始
S48.11	中央新幹線が基本計画路線に決定（起点：東京都、終点：大阪市）
S52.7	宮崎実験線で走行試験開始
H1.8	新実験線建設適地として山梨県を選定
H2.2	運輸大臣が東京・大阪間の地形地質調査指示
H2.11	山梨リニア実験線先行区間に着工
H9.3	先行区間18.4%完成
H9.4	走行試験開始
H15.12	世界鉄道有人最高速度 時速581*を達成
H17.3	実用技術評価委員会が「実用化の基盤技術が確立した」と評価
H18.9	JR東海が先行区間の設備更新と一般区間の延伸の建設計画を発表
H18.12	実用技術評価委員会が平成28年度までに実用化の技術を確認することを提言
H19.1	国土交通大臣がJR東海の基本計画と建設計画の変更を承認
H19.4	JR東海が平成37年（2025年）をめどに首都圏～中央圏での営業運転開始の目標を発表
H19.12	JR東海が首都圏～中央圏を超電導リニアにより、建設費5兆1千億円を自己負担で建設する方針を発表
H20.1	国土交通省が民間主導での新幹線整備を容認
H20.7	国土形成計画において「中央新幹線について調査を進める」などと明記
H20.10	JR東海等が地形・地質等に関する「3ルート全ての建設は技術的に可能」とする調査報告書を国土交通省に提出
H20.12	国土交通省が輸送需要量に対応する供給輸送力等に関する事項を始めとする4項目調査を指示
H21.6	JR東海が「1県1駅」「中間駅の建設費用は地元負担」と正式公表
H21.6	JR東海が東京・名古屋市附近間の路線の長さや工事費等を公表
H21.7	JR東海が東京・名古屋市附近間の維持運営費や輸送需要量等を公表
H21.7	実用技術評価委員会が「実用化に必要な技術の確立に見通しが得られた」と評価
H21.10	JR東海が東京・大阪市間の工事費や輸送需要量等を公表
H21.12	JR東海が中間駅の建設費を公表

■表 リニアモーターカーの歩み

ついて調査が行われます。その後国土交通大臣の諮問機関である交通政策審議会の諮問・答申等を経て、整備計画の決定となります。走行方式としてのリニア方式もこの中で正式に決定されます。その後、同様の建設指示が出され、ルートや中間駅が確定する工事実施計画の申請・認可を経て着工と進むわけですが、環境アセスメントなどの手続も必要となります。



■図 ルート図

動き出したリニア中央新幹線

ではリニア中央新幹線は一体どの段階まで進んでいるのでしょうか。地形・地質等に関する調査は、昭和四十九年から甲府・名古屋間の山岳トンネルの調査が実施され、その中間報告の中でいわゆるA、B、Cの三つのルートが示され、平成二年には東京・大阪間の地形・地質調査等の指示が出されました。

こうした中、平成十九年四月、JR東海が東海道新幹線の代替的なバイパスを自らのイニシアチブのもとに推進し、先ずは平成三十七年に首都圏と中京圏間の営業運転開始を目標とする中長期的な経営方針を発表しました。これにより、長い間大きな進展がみられず実現を危ぶむ声さえ聞こえてきた状況が一変します。さらに同年十二月、JR東海は首都圏から中京圏間のリニア中央新幹線を全額自己負担で建設する方針を発表、この方針を国土交通省が容認したことから、リニア中央新幹線実現へ新たな第一歩を踏み出すことになりました。

二十一年十月には、JR東海等により、十九年余りにわたり行われてきた東京・大阪間の全

間の地形・地質等の調査結果として、すべての調査範囲において路線建設は可能とする報告書が国土交通大臣に提出されました。同年十二月には、輸送力や建設費用などの追加項目の調査指示がJR東海等に出され、その前提としてルートや駅などに関する地域との調整が、二十一年一月から沿線都県とJR東海との間で進められてきましたが、年末に、調査報告書が国土交通大臣に提出されました。今後は、次のステップとして国の「交通政策審議会」において具体的な審議が行われることとなりますが、本県では、今後も沿線都県と連携しながら、整備計画の決定が早期になされるよう取り組んで参ります。

リニアを活用した県土づくり

中央新幹線は、地域間の交流・連携に資するものであり、巨大かつ効率的な経済圏の形成などに大きな波及効果が期待されています。空港や新幹線を持たない本県においても、明治三十年代の中央線の開通や昭和五十年代後半の中央自動車道の開通に匹敵する経済や産業の発展の起爆剤になることが期待されますが、駅が設置されても首都圏と中京圏との単なる通過駅となってしまうのは、リニアがもたらすメリットを最大限に享受することはできません。リニア中央新幹線開通という優位性を活かし「暮らしやすさ日本一」を実現するには、地域の魅力を高め、多くの人や企業を本県に誘導するこ

とにより、県全体を活性化していくことが重要です。このためには、できるだけ早い段階から幅広い視点に立ち、リニアを活用した県全体の活性化方策やリニア新駅と県内主要拠点とのアクセスをはじめとする基盤整備のあり方など、リニア開通を見据えた県土のグランドデザインについて検討し、各種施策に計画的に反映させていく必要があります。

「リニア活用基本構想」に向けて

そのため、今年度から庁内にリニア建設推進本部を設置し、建設促進に向けて部局横断的な取り組みを強化するとともに、活性化方策についても中長期的な視点から検討を行っています。また、リニア中央新幹線の開通が本県の人口や経済等にどのような影響を与えるのかを定量的に予測するとともに、首都圏や中京圏の住民や企業の「山梨県への期待」といった意識調査も行っています。さらに、交通、都市計画、産業、観光、農業など幅広い分野の外部有識者の専門的観点からの意見や助言をいただき、今後の議論の参考にするため「リニア活用推進懇話会」を立ち上げました。この調査や本部での検討、さらには懇話会での議論を踏まえ、将来的にはリニア新駅の位置が概ね決定した段階で、リニアを最大限活用するための基本的な指針となる「リニア活用基本構想」をまとめることとしています。

山梨県立リニア見学センター

山梨リニア実験線での走行試験の様子を見学したり、超電導リニアやリニア中央新幹線の概要を模型や各種の展示物等によって紹介しております。

※走行試験予定等はJR東海HPをご確認いただくか当センターにお問い合わせ下さい。

場 所 山梨県都留市小形山2381

電 話 0554-45-8121

開 館 午前9時～午後5時(入館無料)

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌火曜日) 祝日の翌日、年末年始

駐車場 無料(バス、乗用車)

リニアに関する情報や関連イベント等の情報を提供しております

リニア交通課ホームページ <http://www.pref.yamanashi.jp/linear-kt/index.html>

リニアファンクラブ <http://www.pref.yamanashi.jp/linear-kt/linear-fc-top.html>



リニア中央新幹線実現への道のりは、むしろこれからが大切であり、乗り越えなくてはならない課題も多くあると思いますが、こうした取り組みを着実に施策に反映させ、リニア開通を最大限に活用した県土づくりに取り組んでいきます。

山の暮らしを守るために

鞍打大輔（特定非営利活動法人 日本上流文化圏研究所 主任研究員）

「日本・上流文化圏構想」

山梨県の南西部、富士川の支流である早川流域沿いに位置する早川町は、面積三七〇平方kmの九十六%を森林が占め、人口約一四〇〇人のほぼ半数が高齢者という典型的な過疎高齢化の町だ。それでも平成十四年に平成の大合併には組しないことを



■写真1 町の風景（町最奥の奈良田集落）

いち早く表明し、町の生き残りをかけ自主自立の道を探っている最中である。

そんな早川町では、平成六年に策定した第四次総合計画「日本・上流文化圏構想」を核としたまちづくりを進めている。この構想は、地域で培われてきた自然と上手に付き合うための生活文化や生活哲学を掘り起こし、サステイナブルなライフスタイルとして再生させようというものである。これを早川町の暮らしの中で具現化することを目標とするとともに、近代化がもたらした様々な社会問題へのアンチテーゼとして広く社会に提示していくことを理念として掲げ、平成八年に構想推進の担い手となる日本上流文化圏研究所（以下、研究所）を設立した。

研究所は設立当初、町役場の一組織であったが、平成十八年にNPO法人として独立し、町の中間支援組織として地域資源の調査研究や収集整理、町民のまちづくり活動支援、都市農村交流の推進といった活動を、五名の職員が町内外のボランティア

な力に支えられながら展開している。

研究所のこれまでの取り組み

研究所のミッションを一言で言うと、「山の暮らしを守る」ことである。そのために、以下の三つの取り組みを進めている。

- ① 山の暮らしの価値を伝える（地域資源の掘り起こしと情報発信）
- ② 山の暮らしの担い手を育てる（町民参加型の活動展開、住民活動のサポート）
- ③ 山の暮らしの課題を解決する（調査研究、政策提言、及び社会実験）

山の暮らしの価値を伝える

研究所設立当初、まず始めたのは地域資源の調査であった。町民とともに昔の遊び、郷土食、古文書などをテーマにした研究班を立ち上げ、町民全員を取材しweb上で紹介する「二〇〇〇人のホームページ」を展開してきた。これらによって、歴史や文化、また人々の暮らしが掘り起こされた。

山の暮らしの担い手を育てる

平成十四年には、掘り起こされた地域資源の活用と活性化の担い手育成を目的とした「あなたのやる気応援事業」をスタートした。これは住民から地域資源を活用した商品開発や起業のアイデアを募集し、活動資金を助成するという事業で、三年間で二十四グループに助成した。

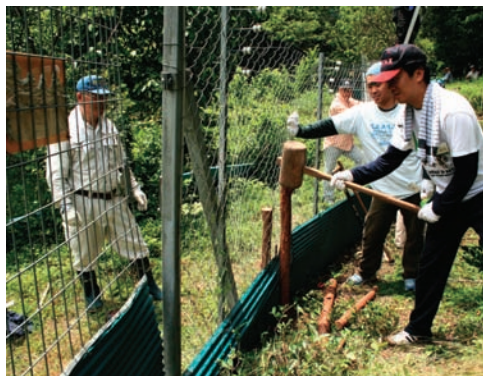
そば屋を復活させた女性グループ、地元の大豆を使った豆腐料理を



■写真2 2000人のホームページ。実際に掲載されているもの



■写真3 地域づくりインターン事業。学生と住民のワークショップ風景



■写真4 ボランティアに獣害対策用電気柵の管理作業の様子

出す宿泊施設、有給農地をブルーベリー農園にした地元の団体など、徐々に成果が形になってきている。こうした住民活動や早川町のまちづくり全体を、町外からも応援してもらう仕組みとして、平成十六年に「早川サポーターズクラブ」を立ち上げた。クラブ会員から頂く年会費の半分を住民のまちづくり活動の原資として使っている。

会員数は約三〇〇名で、毎年五〇万円程度がまちづくり活動に使われている。会員には、隔月発行の会報「やまだらけ」を通じて、知られざる早川町の魅力、住民活動で生まれた商品、町民がガイドや講師役となった体験教室やツアーなどを紹介、販売、実施している。

山の暮らしの課題を解決する

大学生との関わりが深いのも研究所の特徴である。早川町をフィールドに卒業論文や修士論文を書く学生をサポートする「学生研究奨励制度」や、まちづくりや山村に興味のある

学生を夏休みに三週間程度受け入れ、町内の観光施設の改善策等を提案してもらう「地域づくりインターン事業」などを通して、これまでに一〇〇人を超える学生が町を訪れた。移住者受け入れによる空き家の有効活用など、実際に町の施策となった論文もあれば、町のインフォメーションセンターである「南アルプスプラザ」を改装したり、集落と協働で地元の歴史や文化を紹介するパンフレットを作成するといった具体的な成果も生まれている。

集落の今後をどう考えるか

このような取り組みを通して少しずつ成果も出てきてはいるものの、まだまだ課題は山積している。というより、状況は悪くなっていると言った方が正しいであろう。

ここ十年で人口が五〇〇人以上減少するなど、過疎化に歯止めはかかっていない。「山の暮らし」の原点

である集落では人口減少とともに高齢化が著しく進み、祭り、葬式、草刈り、水源の管理といった共同作業がままならなくなってきた。手入れの行き届かない山林や耕作放棄地も増加し、そうした土地が野生生物の住処となり、お年寄りが丹

誠込めて育てた農作物が荒らされ、さらに耕作意欲を減退させるといった悪循環も生まれている。

このような状況に対して、研究所では、ボランティアを受け入れ、集落で管理している獣害防止用の電気柵のメンテナンス作業をサポートしたり、地域の新たな担い手として移住希望者に空き家を紹介するといった事業を進めている。また、今年からは町と協力して、全集落から、共同作業の現状を聞き取る調査も開始した。集落を維持・活性化していくため、あるいは衰退するにしても最後まで町民が幸せに暮らし続けられるためにはどうすれば良いか、この調査によってその糸口を探りたいと考えている。

「山の暮らし」の再生に向けて

研究所の目標とする住民自治による「山の暮らし」の再生には、町民自らが、地域の様々な問題を解決し、活性化策を考え、自分たちの意思と責任の上で地域を作っていく風土を作っていくことが必要である。研究所の役割は、そうした町民の挑戦を、調査研究や社会実験を通して先導、またサポートする事にある。

さらに研究所をNPO法人化したことで、町の活性化と自らの経営の両立が求められることになった。これに対しては、行政が支える研究所から、町民が（会員として）支える研究所への転換と、これまでの研究成果を事業化する、いわゆる社会的起業の視点が不可欠であると考えている。

もう一方で、地域の努力だけでこうした課題が解決するとは到底思えない。多くの山林を抱える農山村は、様々な側面で公益的な機能を発揮し下流部や都市部の人々の暮らしを守ってきた。こうした考えに立ち、国として農山村をどう守っていくのか、社会全体での議論を喚起して行く事も研究所の役割の一つと感じている。

【写真提供】

NPO法人日本上流文化圏研究所

鞍打 大輔 プロフィール

(くろうち だいすけ)

山梨県南巨摩郡早川町在住
特定非営利活動法人日本上流文化圏研究所 主任研究員
1974年 大阪府生まれ
1997年 早稲田大学理工学部建築学科卒
1999年 早稲田大学大学院理工学研究科修了 工学修士
1999年 日本上流文化圏研究所 研究員 現職に至る
早稲田大学理工学部建築学科後藤春彦研究室在室中の1996年から、日本上流文化圏研究所の運営に携わり、大学院修士課程修了後、早川町に1ターンし同研究所に就職。以来、早川町民を巻き込みながらの地域づくり活動を精力的に展開している。



二地域居住を通じた地域づくり

佐藤 彰啓（やまなし二地域居住

推進協議会会長）

近藤 直也（山梨県観光部観光振興課

やまなしライフ推進担当）

週末は山梨にいます

全国的な傾向として、中山間地域における人口の減少や少子高齢化が問題になってくる中で、都市住民を地方に移住、あるいは定住させることを施策的に進める自治体が増えてきています。また、定年を迎えた団塊の世代の方を中心に、第二の人生を都会ではなく田舎の自然の中で過ごしたいというニーズもあります。

こうした背景のもと、東京に隣接している山梨県は、移住・定住よりも、二地域居住という形での田舎暮らしが適しています。平日は都会で仕事をして週末は山梨の自然の中でリフレッシュするというのが現役世代でも十分可能です。

山梨県では、観光キャ

ンペーンで「週末は山梨にいます。」というキャッチフレーズを使っています。もともと観光キャンペーン用のものだったのですが、まさに二地域居住のキャッチフレーズとしてもそのまま使えるものです。また、「週末」という言葉には団塊の世代の方々の退職後という意味合いも込められているそうです。このように、山梨県はその地域優位性を生かして二地域居住を積極的に進めている県なのです。

田舎は不便!?

田舎は、都会に比べてどうしても利便性が高くないことは事実です。「坂がなくて、スーパーが近くて、駅が近いところ」を希望される都会の方もなかにはいますが、駅が近いというのは都会にいまする感覚なのです。田舎に都市的な利便性を求めればどうしても不自由に感じるでしょう。でも田舎暮らしの本質と目的を考えた時に、果たしてそうした感覚はどのようなか。発想を変えて自分の

生活をもっとゆったりさせると、それは何の不自由さもないということに気付くのではないだろうか。

私（佐藤）も山梨に二地域居住している一人ですが、本当に素晴らしいところですよ。

高原地帯が多いですから涼しくて過ごしやすいです。それと景観のすばらしさです。例えば日本百名山を全部登った方やヒマラヤ登頂経験のあるアルピニストが、最も山の美しい地ということで終の棲家を選んだのが山梨の八ヶ岳だったという話も聞いています。朝日に輝く南アルプス、甲斐駒ヶ岳、そして富士山……これらを眺められるところが素晴らしいですね。

田舎暮らし元年

戦後の日本社会は、若者も、物もお金も情報も全ての流れが「田舎から都会へ！」でした。こうした流れに乗って高度経済成長を遂げてきたというのは歴史的な事実です。しかし社会が成熟してくるにしたがって



■写真1 ハヶ岳赤岳山頂から見る夜明け（写真提供 山梨県）



■写真2 自分たちで作った野菜は格別！（写真提供 山梨県）



■写真3 平岡の棚田一なにげない日常の風景が地域の宝物（写真提供 山梨県）

行きづまってきました。

徹底した効率性と合理性が追求され、分秒を刻むような環境下に置かれた人間は、高いストレスを感じています。どんなに自己制御出来る立派な人も、一生命体にすぎません。自然の中で生まれ育ってきた長い歴史を持っています。ですから、コンクリートジャングルの中に閉じ込められ続けると、そこから自然へ帰ろうという流れが生じてくるわけです。いわゆる自然回帰です。田舎暮らしへの憧れは、都会人が、自然回帰を渴望していることの表れです。

では、日本でいつ頃から田舎暮らしへの憧れが始まったかと考える

と、一九九〇年のバブル崩壊が一つの契機だったと思います。より豊かな生活を追い求めるという「生きがい」があっさり破綻してしまった。すると人々の心の中から「果たしてこれまでの自分の生き方は正しかったのだろうか」という疑念がふつふつと湧き上がってきたのです。

週末は農業に励む大会社の社長の姿がTVに映し出されるようになったこの時期は、都会暮らしから田舎暮らしへの転換元年であったと思います。都会の人々が、生活理念とか思想ではなく、ごく自然な形でそういう暮らしを求めたのです。

都市生活への不安

特に最近では、田舎暮らしブームと呼ばれるような状況になりつつあります。

その背景として、一つには「食の不安」があると思います。産地、賞味期限、農薬、添加物、BSE……特に最近では海外から何が入ってくるかわからない。ですから自分や家族の口に入る物は自分の手でつくりたいというニーズが高いのです。

それからもう一つ、「災害の不安」があると思います。昨今は大震災がいつどこで起きるかわからないという状況にあります。例えば阪神・淡路大震災がよい例です。皆、都会では大丈夫と、思いながら生活を楽しんでいたのです。しかし、実際には起きてしまった。いざ起きてみるとマンションは崩壊してローンだけが残るという現実がそこにありました。そして次は首都・東京で起きるかもしれない、足元がバツサリいかもかもしれないという不安、都会生活に依存した現在の暮らしが持続可能かという不安に襲われたのです。

二地域居住という新しい発想は、こうした人々にとって一種の保険であり、「災害に遭っても健全に発展し続けられる大都市」への期待なのではないかと思っています。

地域の宝物を再発見

田舎暮らしというライフスタイルを一過性のブームで終わらせないために、田舎の人達自身が、自分達の地域にあるかけがえのない

ものを再発見することが必要だと思います。それは美しい川、棚田といった、農村的な風景であったり、その土地でとれる食材であったり、昔ながらの人付き合いであったり、そういった何気ないどこにでもあるものなのです。

都会から来た人が田舎を散策すると、日々刻々、紅葉していく風景がとても新鮮に映る。地元の人にとってはそんな風景は当たり前のものですが、都会の人が感動する姿を目の当たりにして、「ああ、これも捨てたものじゃない」と初めて気がつくのです。

郷土愛を育みつつ、新たな地域づくりを考えていくことが大事なのです。都会の人達に受け入れられる要素は特別なものではありません。少しでも新鮮な目で見渡せば、どこにも宝物が見つかるし、それに気づくところから地域の発展は始まるのです。

都会で得たものを地域に

よく、いかにして地元の若者を田舎に留めるか、という議論がなされますが、私は、逆に一度、若者を都会に送り出してみても「あり」だと思います。

Uターン、Iターン、Jターンというように若者を田舎へ呼び寄せるパターンは様々ありますが、現在ではどちらかというとIターンが中心です。でも私は、最も力を入れるべきはUターンだと考えています。都会へ働きに出て第一線で活躍する。そ



■写真5 地域の特産品、美味しい干し柿（写真提供 山梨県）



■写真4 美しい紅葉とせせらぎに感動（写真提供 山梨県）

思い込みの場合もあります。品質は決して悪くはないのに売り方が上手くないだけかもしれません。都会の人に買ってもらうためにはそれなりのマーケティングや販売ノウハウが必要なのですが、そうしたことは田舎の人達よりもむしろ都会の人の方が詳しかったりします。体験的に都会のニーズをよく知っているからです。ですから都会の人がそういう土地に移り住んだことをきっかけにして、地場産業が活性化した例は全国にたくさんあるのです。

伝えることの難しさ

都会から来る方は貴重な戦力で
すから、受け入れる側も、若者が

して一線を退いたら自分の生まれ故郷に戻り、都会で得たものを地域に活かしていく。こうした好循環が続く社会構造が最も望ましいと思っています。

例えば、「野菜が思うような値で売れない、それは価値の低い野菜だからだ」と思っている農家の方がいたとします。でもそれは単なる

また戻りたくなる環境や、都会の人達が地元の人達と一緒にやって地域を興していけるような環境をいかにつくるか、もっと考えていくことが重要なのです。

ただ、田舎暮らしの魅力をどのようにに都会へ伝えるかというところは非常に難しいところなのです。ある調査によれば、四割のサラリーマンがいずれ田舎に暮らしたいと思っているそうです。でも実際に行動へ移す人はそのうち何人いると思いますか。砂漠の中の砂の一粒という感じが現実です。そんなピンポイントなところに情報を送ろうというのですから、至難の技です。

今日は何しようかな

実際に二地域居住している人の満足度は非常に高いのです。

満足しているというよりも、むしろ張り切りすぎてしまうくらいです。田舎に行くと、大人の子どもが遠足に行くような興奮状態になっ



■写真6 インタビュー中の近藤さん（左）と佐藤さん（右）

ちやうわけです。毎朝四時ぐらいに目が覚めて、「今日は何しようかな！」って。

しかもただでさえ最初からそんな勢いで作業をしているのに、お昼の時間になっても「いやこれはやっぱり午前中に終えなくちゃ」って感じでやめないわけですよ。結局、お昼ご飯が午後二時になってしまったりして……。

悲しいかな、サラリーマンの感覚をそのまま田舎に持ち込んでしまっ



■写真7 農業体験の様子、みなさん腰は大丈夫？（写真提供 山梨県）



■写真8 田舎ぐらしの相談会の様子

元へ呼びかける、そこに行政が一枚噛むか噛まないかで結果は全く違ってきます。行政はやはり信頼感がありまますから、利用者は安心して応募することが出来るのです。行政がやるべきことと民間がやるべきこと、その二つが上手く噛みあって、初めて成功するのです。これからは都会と田舎、すなわち都市と地方が対立する関係ではなく、互いに手を取り合って共生していく時代になることでしょう。それなくしては、田舎はもとより都会も成り立ち得ない状況になってくると思っています。

佐藤 彰啓 プロフィール

（さとう あきひろ）

1944年岐阜県生まれ。

早稲田大学法学部卒業後、農村雑誌『家の光』編集者として、全国各区地の農業問題・農村社会のあり方や地域おこしの仕事に従事。その経験を踏まえ、自然豊かな地域を求める都会の人々を支援するため、1990年東京・四谷に「ふるさと情報館」を設立。現在、「ふるさと情報館」の運営会社である（株）ラーバンならびに（株）ふるさとネットの代表取締役。現在、「やまなし二地域居住推進協議会」会長も務める。

近藤 直也 プロフィール

（こんどう なおや）

山梨県観光部観光振興課やまなしライフ推進担当

山梨県生まれ、1983年山梨県庁入庁。

総務部国際課、土木部土木総務課、観光部大阪事務所を経て、2009年から現職（やまなしライフ推進担当）。

本稿はお2人にインタビューし、広報委員会にてとりまとめたものです。

民間と行政が手を取り合って

ているのです。自分の行動にノルマを課して達成感を得たいという。そういう田舎暮らしをする人が結構いるのです。肉体的なことをあまり意識しないで勢いに任せてやってしまい、最後に体がストライキを起してしまうこともあります。

平日は東京で会社員をしているわけですから、本当は、あまり無理し過ぎないことがコツなのですが。

協議会では、今後いかに民間企業

を組み込んでいけるかということを考えています。一口に民間企業といってもいろんな業種があります。それがまた大きな特徴なのですが、二地域居住者の立場からトータルな生活支援方法を考えると、むしろそうした業種の多様性が成功の秘訣になってきます。

それぞれの企業がもつ得意分野を活かしながら連携して、ネットワークを構築してもらうことを狙っています。業種を超えたつながりが新たな可能性、すなわち需要をつくり出す、これは二地域居住活動と民間企

業双方にとって、非常に重要なことです。二地域居住を推進する活動が、民間企業のビジネスとしても成立するところまで行けたらいいなと考えています。

しかし、行政でなければできないこともあります。

例えば都会への呼びかけとか、空き家情報の提供を地



■写真9 ガイドブックで情報発信

鉄道トンネルをワインカーヴと遊歩道に再生

近代化産業遺産を活かしたまちづくり

三森 哲也（甲州市観光産業部 観光課）

日本のぶどうとワイン産業の発祥地である甲州市は、甲府盆地の東の玄関口に位置し、人口三万六千人、平成十七年十一月一日に塩山市・勝沼町・大和村が合併して誕生しました。「果樹園交流都市」をキャッチフレーズに、果樹を中心にした観光交流によるまちづくりを進めています。

特に旧勝沼町の地域は、町の歴史がそのままぶどうとワインの歴史につながり、ぶどう栽培千三百年、ワイン造り百三十年の伝統があります。観光ぶどう園は百軒余り、ワイナリーは大小三十社が操業しています。

近代化産業遺産を活かす

勝沼地域の観光は、ぶどうとワインを核にした振興が図られてきたが、平成十年代に入ると、観光客数の減少傾向が見られ、新たな振興策が求められていました。このため旧勝沼町では、明治以降の地域の発展に貢献した近代化産業遺産が多く残っていることに着目し、平成十六年度に遺産群を活かした活性化策『勝沼タイムトンネル百年構想』を策定しました。

構想では、近代化産業遺産群にスポットをあて、ぶどうとワインの歴史ストーリーを前面に出して、文化的な厚みを感じてもらえる観光地づくりを提唱しました。貴重な歴史遺産の修復を行うとともに、遺産群を

結ぶ散策ルート（フットパス）を構築し、交流人口を増やしていくことを目標としました。

さらに埋もれている地域資源の発掘、再発見を通じて、住民の地域に対する愛着や誇りを醸成し、観光関係者だけでなく、住民と一体となった生涯学習による観光まちづくりの推進を目指しました。

理想的なワインカーヴ

具現化に向けては、国交省のまちづくり交付金や県補助金などを充てて整備に取り組みました。

テーマに応じて、地域を三つのエリア①鉄道遺産エリア②ワインの歴史エリア③ぶどうの歴史と勝沼宿のエリア、に分けました。まず取り組んだのが、中央本線の廃線トンネルの活用でした。平成九年に時間短縮のため、新しいトンネルが建設されたことに伴い、勝沼地域にある二本のトンネルが閉鎖されました。

両トンネルは、明治三十六年（一九〇三）に開通したトンネルで、内

部は建設当時のままのレンガ造りで、百年の歴史を感じさせる雰囲気を残しています。

JR東日本から無償譲渡を受けた旧勝沼町では、一本をワインカーヴ（貯蔵庫）、一本を遊歩道として整備することとしました。

平成十六年度に、まず東京寄りにある深沢トンネルをワインカーヴに再生させる事業に取り組みました。供用開始は平成十七年五月でした。長さ千メートルの内部はレールが取り払われ、手前二百メートルが個人用、奥の九百メートルがワイナリー用のセラーとなっています。

レンガ造りの坑内は、年間を通して気温が一五度前後で保たれ、ワインの貯蔵には最適の環境です。大きなセラーを持たない地場ワイナリーでは、近くに大量に貯蔵できるセラーがあることは非常に有難いことであり、ワイン産業の振興に役立っています。個人用は、貸セラーとなっていて、借主の方のワインを貯蔵しています。首都圏を中心に県外者の利用が多く、常に空き待ちの状態



■写真1 一面にぶどう畑が広がる甲州市勝沼町



■写真2 深沢トンネルはワインカーヴに生まれ変わった



■写真3 「龍憲セラー」国の登録文化財



■写真4 レールが残る遊歩道



■写真5 近代化産業遺産をめぐるフットパスツアーは人気がある

産をはじめ、近代化産業遺産の整備など、明治のワイン醸造所のトンネルや大日影をつくりました。郷駅を起点にルートを設定を行い、勝沼ぶどう郷駅を起点にルートをつくりました。大日影のトンネルや明治のワイン醸造所のトンネルなど、近代化産業遺産をはじめ、

です。個人用ラックの使用料金は、一ユニット（約三百本）で月額二千五百円となっています。市営の観光施設である勝沼ぶどうの丘が管理運営を行っています。

トンネルのワインセラーは、急に思いついた話ではなく、勝沼では歴史的な経緯がありました。明治十年にフランスへ留学し、二年後に帰国してワイン産業の基礎を築いた土屋龍憲が、中央本線のトンネル工事からヒントを得て、明治三十一年ごろに自宅の醸造所にセラーを造りました。トンネルと同じレンガや工法を用いました。このセラーは「龍憲セラー」と呼ばれ、国の登録文化財として保存されています。

このようなセラーを身近に見ていた地元では、トンネルが廃線になるころから「ワイカーヴにしよう」という声が上がっていました。

臨場感あふれる遊歩道トンネル

ぶどう郷駅寄りにある大日影トンネルです。平成十九年八月に再開通しました。長さ千三百六十七メートルの坑内は、蒸気機関車の煤（すす）が付着したレンガや、鉄道標識、待避坑などが残っています。レールや枕木はそのまま、両側を歩きやすく舗装した以外は、可能な限り鉄道トンネル当時の雰囲気を残しています。

一直線に延びたレール沿いに歩いてみると、ふと向こうから列車が走って来るような錯覚に陥ってしまいます。実際、入口付近は隣りのトンネルを通過する列車の音が大きく聞こえるため、驚いて悲鳴を上げた人もいます。臨場感ある鉄道トンネルは、鉄道ファン以外にも大勢訪れています。

中央本線の開通は、勝沼のぶどうとワイン産業の発展に大きな役割を果たしました。東京まで馬の背に載せて何日もかかって運んでいたぶどうやワインが、わずか半日足らずで輸送できるようになった

人をつなぐフットパスの輪

これは、まさに流通革命でした。鉄道開通以降、増産が図られるとともに観光団の招聘も行われ、ぶどう狩りとワイナリーの見学という今日の観光のもとがつけられました。

近代化産業遺産は「活用されることに意義がある」と言われます。鉄道トンネルの役割を終えた二本のトンネルは、ワインセラーと遊歩道という新たな使命を与えられて、今なお現役のトンネルとして地域社会に貢献しています。

今回の取り組みでは、遺産群の修復などハード事業と並行して、遺産群をつなぐフットパスを活かしたソフト事業を展開しました。

フットパスは、十九世紀に英国で始まった取り組みで、自然や歴史文化を楽しみながら歩く散策道のことです。市民も

【写真提供】
甲州市観光産業部 提供

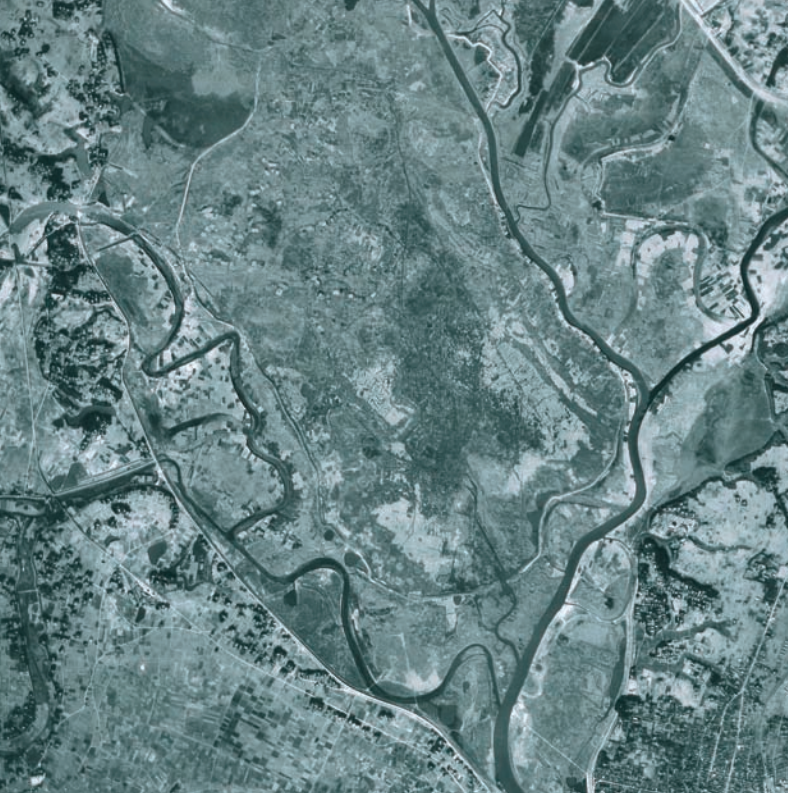
奈良時代から江戸時代の史跡、数々のワイナリーをまわります。場所によつては、ぶどう畑の間を縫うように歩きます。勝沼ならではのコースです。

市民有志によるフットパスの会も立ち上がり、イベントも開催しています。沿道の農家の皆さんが自宅を利用して「縁側カフェ」を開くなど、新たな展開も見られます。人をつなぐフットパスの輪が徐々に広がり、地域の活性化がより一層、図られていくことを願ってやみません。

三森 哲也 プロフィール (甲州市観光産業部観光課)

1955年山梨県勝沼町（現甲州市）生まれ。大学時代の4年間を除き勝沼に在住。78年に旧勝沼町役場に入る。広報、観光、ワイン振興、ぶどうの丘勤務など、対外的な仕事の経験が多く、住民としてもまちづくり活動に関わる。合併前から近代化産業遺産の整備事業を担当、ぶどうとワインの歴史文化を活かした地域活性化に取り組んでいる。





5	4	3	1
6			2
7	8		



坂東の原風景

渡良瀬遊水地

渡良瀬遊水地は栃木、群馬、埼玉、茨城四県の県境にまたがり、面積は三三〇〇ha、治水容量は一七二八〇万³mと日本最大の遊水地である。遊水地には渡良瀬川、思川、巴波川の三河川が集まり、利根川水系の治水上、大きな役割を果たしている。

渡良瀬遊水地の歴史

渡良瀬遊水地の計画は一九〇三年に遡る。その後、一九一〇年から一九二二年にかけて行われた渡良瀬川の改修工事によって誕生した。

遊水地誕生以前の当地は、沼地や湿地が広がる洪水常襲地帯であった。その為、当地の谷中村の人々は集落を堤防で囲み、母屋の近くに土を盛り、水塚を造って洪水に備えていた。しかし、一八九〇年、一八九六年の洪水で氾濫水とともに足尾銅山の鉍滓等が沿川の農地に流出、その被害は広範囲に及び鉍毒反対運動が拡大した。さらに一九〇二年の洪水で谷中村は水没してしまつた。

広報委員会 遠藤 徹也

そこで一九〇三年、政府による第二次鉍毒調査委員会は「足尾銅山に関する調査報告書」を提出、その過程で谷中村の遊水地化案が具体化したものの反対闘争が発生するなど、工事着手に至るまで紆余曲折があった。やがて村民の移住が始まり一九〇六年に谷中村は廃村、一九一八年には渡良瀬川付け替え工事が完了し、人々の大きな犠牲のもと、一九二三年に遊水地は完成した。

治水事業の推進

その後も相次いだ大洪水を契機に、渡良瀬川、思川、巴波川に沿って新しく囲繞堤や越流堤が設けられ、大洪水時だけ調節池に川の水を流入させて洪水調節機能を増大させる事業が実施された。この事業は一九六三年に着工され、一九七〇年に第一調節池、一九七二年に第二調節池が概成、一九九七年には第三調節池も概成した。さらに、第一調節池内を掘削して貯水池を設け、洪水調節の容量増大と新規都市用



- 1 遊水地内部の河道部と調整池を区切る囲繞堤。背後には広大なヨシ原が広がる
- 2 遊水地内を流れる渡良瀬川
- 3 空中写真 1947年【米軍撮影の空中写真(1947年撮影)】
- 4 空中写真 1981年【国土地理院撮影の空中写真(1981年撮影)】
- 5 空中写真 2004年【国土地理院撮影の空中写真(2004年撮影)】
- 6 一定の水位以上となった際、洪水を調整池に流入させる役割を持つ越流堤。囲繞堤の一部が低くされている
- 7 谷中湖周辺は広場として整備され、人々で賑わう
- 8 旧谷中村役場跡。遊水地の一部が谷中村史跡保全ゾーンとなっている



水の容量確保等を目的とした事業が進められ、一九九〇年に谷中湖が概成した。

三枚の空中写真のうち、一九四七年は関東各地に大きな被害をもたらしたカスリーン台風が来襲した年のものである。一九八一年はハート型の谷中湖が整備されつつある様子がうかがえる。

渡良瀬遊水地の自然環境

渡良瀬遊水地は湿地環境が保たれ、特にヨシ原は一五〇〇haと本州最大の面積を誇り、九〇〇種以上の植物が生息する。これは、遊水地としての機能を保持する為にヨシ原や沼をごく自然に残してきた結果によるものであるが、ヨシ焼等、人の手によって自然環境を保全する営みも続けられている。

現在の渡良瀬遊水地には谷中湖を中心にレクリエーション施設が整備され、多くの利用者が賑わっている。その一方、広大なヨシ原には、一〇〇年以上前から始まった遊水地整備により、そこが洪水常襲地帯であったことを忘れるくらい静かな空間が広がっている。

【参考文献】

『渡良瀬遊水地成立史(通史編)』渡良瀬遊水地成立史編纂委員会 二〇〇六年
『渡良瀬遊水地』パンフレット 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所
「財団法人渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団ホームページ」
<http://www1.odn.ne.jp/aan3170/wtrs/>



三鷹市かえで通り自転車道

広報委員会 佐藤 真理子

自転車ブームの到来

最近、“エコ”をテーマにしたライフスタイルや、メタボ対策などの健康志向の影響で、自転車ブームが到来しており、雑誌やテレビなどのメディアでも、高級自転車の特集や、芸能人、政治家の自転車移動の様子が多く取り上げられています。もちろん、本格的なスポーツタイプのものだけでなく、いわゆるママチャリも電動アシストがついたものが普及してきており、まさに、子どもから大人まで、遊びから本気まで、いろいろなシーンで利用される乗り物となっています。

特に、都心部では5kmくらいの短い距離なら実は歩きや車より早いということもあって、通勤時間帯にスーツで自転車にのるサラリーマンの姿をよく見かけます。自転車とは一番縁遠い、坂の街長崎出身の私でも、毎朝、自宅から駅まで自転車で通っています。

自転車と歩行者の共存

自転車の利用者数が増えることは環境や健康面などから色々良いことでもあります。その一方で、同じ空間を使っている歩行者にしわ寄せがきています。自転車と歩行者が区分されていないところでは、高速で向かってくる若者や群れだってくる学生達、後ろからベルを鳴らしまくるおじさん等々、なぜか歩行者がよけ

る立場になっています。このような自転車からの攻撃に臨機応変に対応できない高齢者や子ども、障害者などが、自転車との事故に巻き込まれる結果になっています。

そこで、全国的に自転車の走行環境を整えようという動きがあり、国土交通省と警察庁が手を組んで、平成二十年一月に戦略的に整備を進める「モデル地区」を全国九十八地区選定しました。

東京都内ではモデル地区として、江東区(亀戸地区)、渋谷区(渋谷区幡ヶ谷地区)、三鷹市(かえで通り・三鷹地区)、武蔵野市(かえで通り・武蔵野地区)の四自治体選ばれています。

モデル地区「三鷹市かえで通り」

モデル地区のひとつ、三鷹市と武蔵野市にまたがる『かえで通り』では、昨年度から二つの市が一緒にな

って自転車道を整備しています。

かえで通りはJR中央線武蔵境駅の駅南口から南へ、東八道路までの間をつないでおり、通り沿いには大型のスーパー、小学校、マンションなどがびっしりと建ち並んでいます。まさに“暮らしに密着した通りで、犬を散歩する女性、通学する学生、



■自転車道がまだ整備されていない区間のかえで通り

通勤するサラリーマン、ベビーカーを押して買い物に行く女性、井戸端会議する主婦、日向ぼっこするおじいさんなど様々です。

「かえで通り」を訪れて

かえで通りの自転車道は、三鷹市の東八道路から武蔵野市の武蔵境駅までをつなぐ約一六kmの区間で計画されています。元々幅員が広く路上駐車も多くみられた車道を二m狭め、そのスペースに自転車専用で走ることのできる空間(自転車道)を整備しています。その結果、歩道から自転車がいなくなり、歩行者、



■分かりやすい自転車道の入口



■自転車道ができたことで自転車と歩行者が安全にすれ違う

自転車両方に気持ちよく通行できる空間ができています。事業は平成二十年度、平成二十一年度の予定で、既に昨年度にはかえで通りが連雀通り・山中通りと交わる約〇.六kmの区間が完成しています。今は、今年度の開通にむけ、残りの区間の整備を進めています。

自転車道は、車道や歩道とは縁石ブロックで区切られていて、構造的にも見た目にも別の空間となっています。車道との間にはガードレールも設置されています。自転車は車に比べ、心して走れるようになっていて、また、自転車道は車道と同じ高さとなっているので、歩道に面した車庫入口の凸凹はありません。自転車道のはじまりには路面が青で塗られていて、違いがはっきり分かります。

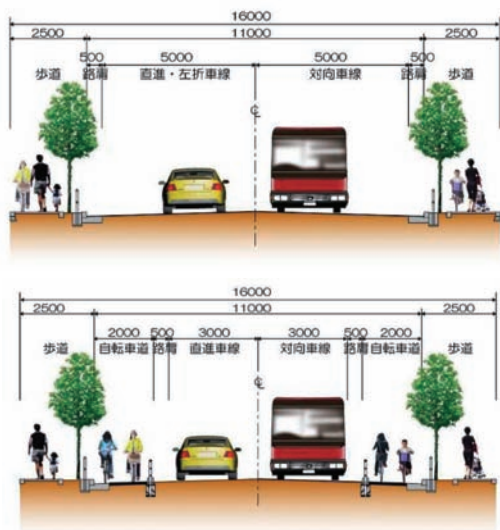


■凝ったつくりのバス停留所付近

かというところ、そこはバス停の島を車道寄りに作り、その区間は自転車のほうが歩道寄りになることになっています。バス停の島にはガードレールや、自転車道を横切る横断歩道もついており、何とも凝ったつくりになっています。

自転車道の安心を支える

平日の日に現地を訪れてみると、自転車道を次から次に自転車が行き交っていて、その脇の歩道では高齢者やベビーカーを押す人たちがゆったりと歩く姿が見られました。自転車と歩行者を分けたことでどちらに



■断面図 上：整備前、下：整備後（出典 三鷹市ホームページ）

とっても安心、快適に利用できる環境ができたようです。ただ、別の自転車があるときに歩道を走行する人も見うけられ、まだ十分に自転車道の利用が定着してないようでした。

土木コンサルタントとしてこのような整備の計画に関わっている身としては、環境にやさしい自転車が、悪者“になってしまわないよう、これからも自転車の利用環境の整備（ハード整備）とあわせて、自転車を利用する人のマナーの向上を促す様々な取り組み（ソフト施策）をセットで進めていく必要性をしみじみと感じました。



東京コンサルタンツ株式会社
技術監理センター地質防災グループ 今井 秀浩さん

H20管内道路防災検討業務

発注者：国土交通省 関東地方整備局

地域に密着した道路防災計画を目指して

今井 技術監理センター地質防災グループに所属している今井です。平成十三年に入社し、九年目になります。主に斜面防災設計や地盤に関する解析や検討業務に携わってきました。

若松 関東地方整備局表彰業務の「H20管内道路防災検討業務」を担当されましたが、業務の技術的特徴などをお話してください。

今井 この業務では、国道二十号および五十二号の事前通行規制区間において、有識者による現地診断や検討会を通して、落石や崩壊等のおそれがある箇所の対策施設や点検方法に関する留意事項を検討し、国道五

十二号の規制解除に係わる申請を行いました。技術的特徴としては、雨量規制を解除しても規制区間全体の安全性が十分か、また、現在の防災カルテ等により知られている他に災害要因は無いかを評価したところです。さらに、空中写真判読の他、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、最新の斜面状況を確認すると共に、対象地をくまなく現地踏査して災害要因の把握に努めました。

若松 道路防災業務の着眼点はどのようなところですか？

今井 対象地域の地形・地質の形成史、気象状況、災害履歴、周辺地域の土地利用などをよく調べたうえで、個々の事象にどんな繋がりがあり、どんな問題点があるかを総合的に判断したところです。

若松 有識者による診断及び検討会をされたとのことですが。

今井 道路防災対策をより確実なものにするため、各地域に精通した学識経験者に意見をいただきました。

具体的には、想定される災害規模や問題点および対策工の設計諸元を提示し、対策施設や道路防災上の留意点や不足点の指摘と、今後の道路防災対策事業への意見をいただきました。

若松 その他のような検討をされましたか。

今井 これまで、この区間は通行規制が多く、沿道住民の負担も大きかったと思われます。規制解除を実施した際の影響集落数や影響人口を把握して、どの位の沿道住民の方の利便性が良くなるかを検証しました。

若松 今井さんは今後どのような技術者を目指されていますか？

今井 専門的な知識や経験はまだまだ勉強すべき事が多いですが、発注者や社内外の方に「あの人なら」と



■現地での有識者を交えた診断状況

言っていただけのような技術者になりたいと思っています。

若松 まだお若いですが、後輩の方にアドバイスを。

今井 昨今、公共事業への風当たりも強いですが、社会に貢献しているという意識と自信を持って日々の業務に取り組めば、きっと地域の住民の方に納得していただけるような結果に結びつくのではないのでしょうか。

災害発生時の迅速な復旧と正確な情報伝達を目指して

中野 道路計画部の部長をしており、ます中野です。

技術歴二十六年の中で道路の計画や設計を中心に二十年間、最近の六年間は主に道路環境や防災の業務に携わっております。

若松 業務の内容をご説明ください。

中野 この業務は、大規模な地震が発生した場合を想定して、横浜国道事務所が実施している改築工事現場や管理区間の被災箇所の復旧に必要な情報を迅速に収集する方策と初期活動の検討を実施したものです。道路を管理する事務所の使命は、管理路線の迅速な復旧と二次災害の防止と理解しています。そのためには迅速でかつ正確な被害状況の把握が重要となります。

若松 技術的特徴は何ですか。

中野 技術的な特徴としては、検討の手法があげられます。このような業務では、何をどのレベルで検討するかが課題になります。そこで管内に発生が予測される地震の災害シナリオを作成しました。そこから顕在化していく問題点とその解決策を検討しました。具体的には、近年発生した地震災害事例から、初動時における留意事項をデータベース化して整理・分析を行いました。その他、災害発生時の情報収集・処理・伝達、組織間調整・指示・要請、応急復旧等について、今後対応すべき方針を

取りまとめました。

若松 ご苦労された点はどのようなところでしょうか

中野 類例の少ない業務であったため、「検討内容に漏れがないこと」「検討の内容が適切であること」を検証する手法に工夫があります。過去の震災事例を活かしたシナリオを作成するために、北陸地方整備局（中越・能登沖・中越沖地震）へのヒアリングを行いました。また、この検証手法が評価を頂いたとも思います。

若松 発注者自身が被災者となった場合にも役立つものと思いますが。

中野 災害時の対応については、防災業務計画や業務継続計画（BCP）も別途策定されています。

この業務では横浜国道事務所のリソースを分析した上で、情報収集、情報発信を如何に迅速に執り行うかについて検討したのでBCPなどの既存計画に、不足する部分については、今後実施すべき内容として提案しました。業務改善に対する一助となることができたと考えています。

若松 今後どのような技術者を目指されるのでしょうか

中野 今年で五十歳を迎えました。これまで様々な人に支えられてきました。今後は今まで経験してきたものをより多くの人に伝え、支える側になりたいと思います。そのためにも、新しい分野にも興味を持ち続け、技術者として進化していきたいと思っています。

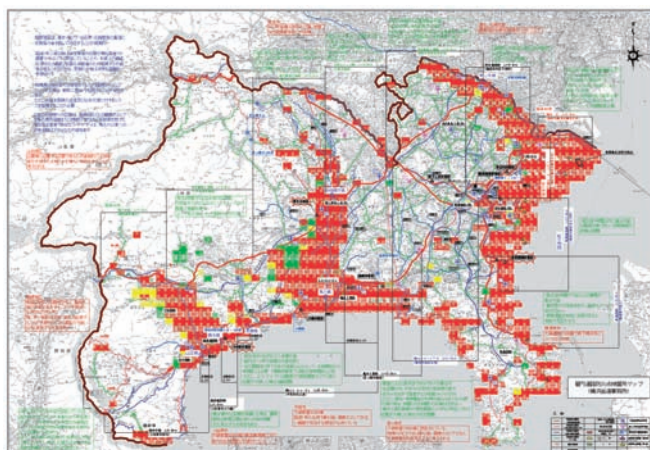
若松 後進の方にアドバイスををお願いします。



株式会社建設環境研究所
執行役員 道路計画部 部長 中野 裕之さん

H20横浜国道事務所災害発生時における迅速な情報収集に関する検討業務

発注者：国土交通省 関東地方整備局



■南関東地震を被災シナリオとした課題抽出図

関東支部 活動紹介

関東支部は創立以来四十一年目を迎え、正会員・地域研究員を含め一七四社を擁する全国最大の支部であり、コンサルタントという職域の確立・地位向上を目的として、対外活動・技術向上活動を主体に、歴史ある厚生事業などを含めた活動を行っています。

対外活動は、今年度も国・県・政令市などの発注者に対し幹部訪問や意見交換会を実施して、取り巻く環境に関する課題や対応についての討議・情報交換を行い、より良いインフラ整備に向けた提案・要望等を行いました。今年の話題は、低価格入札等に伴う設計品質の低下や企業経営の疲弊による人材の流失など、将来の社会基盤整備を担う技術と技術者の消失について、どうすべきかという議論が多くされました。(写真1)

技術向上活動は、関東支部が主催・関与した研修会・講演会・現場見学会など今年度は延べ三十五件で、専門技術に関するもの、環境・品質向上・災害復旧などに関するもの、コンプライアンスや今後のインフラ整備に関するものなど多岐にわたっています。

今年は「低炭素社会のまちづくり」(写真2)、「自らを律するコンプライアンス」(災害復旧に向けた技術)等の講習会が人気を博し多数の技術者の参加を得ました。その他、日進月歩の設計・施工技術に関する勉強会にも多くの技術者の参加があり、この職域の技術者の高い上昇志向とプロ意識が窺えました。



■写真1 自治体意見交換会

関東支部では、創立の初期から会員の厚生事業として、野球大会・テニス大会・ボウリング大会などを継続して開催し、野球大会は今年度で第四十二回に至っています(写真3)。五月の青葉爽やかな神宮外苑球場に各会員四十チームの熱戦が展開され、トーナメントを勝ち上がる毎に応援席も熱狂し、普段の多忙な業務を忘れた楽しい親睦のひと時を過ごして頂きました。

今、我々の団体を取り巻く環境は大変革の時を迎えています。関東支部はより良い国土インフラ整備に資する職域団体として、今後ともこのような活動を粛々と継続してゆく所存です。



■写真3 野球大会風景



■写真2 講習会風景

事務局だより

関東支部のあるビルの近郊は今、新築ビルのラッシュです。大きなビルではありませんが、小さな一戸建て住宅と隣接するビルを壊して新たなビルを建てたり、隣接する小さなビル三棟を一棟にするなどの方法のようです。

事務所のベランダを喫煙コーナーにしていますが、そのベランダから見える範囲のビルでも、テナントがよく引越しをしています。

事務所に通勤する道は、神田駅西口を出て、「西口商店街」を歩きますが、お店の出・退店も多く見受けられます。「長崎ちゃんぽん」が閉店し「麵屋武蔵神山」となり、「携帯電話のBE」が東口に移転し「つけ麺専門店三田製麵所」となりました。西口商店街には鰻屋が「うな正」「名代宇奈と」と二軒あり、麵の店も「神田ラーメン」「名代富士そば」「博多流斗樹」餃子専門店「Chacha」等など、弁当競争も大変で二六〇円・五〇〇円前後で販売合戦です。

すぐ近くに十月より弁当の「新潟本舗ふるさと屋」が開店し昼休みは長蛇の列です。夕方になりますと、焼鳥屋「二番鶏」が盛況です。(一番鶏でないのがみそ?)

コーヒー専門店も沢山あります。「斉藤コーヒー」内神田店のブレンドは絶品です。その他の「アドマチック天国」で紹介されたそば処「浅野屋」は隣り、ゴルフ好きには「ゴルフジャパン」、食ベすぎで体調をこわしたら「内科・胃腸科 神田診療所」等々、便利な事務所の近所です。

地域委員会だより～山梨地域委員会

和食と和飲（ワイン）

秋のぶどう狩りのシーズンも終わりに近づき、中央高速の笹子トンネルを抜け甲府盆地に入ると、ピンク色のたわわに実ったぶどう畑が目に見え込んできます。

このぶどうは古くから「甲州ぶどう」または「本ぶどう」とも呼ばれ、奈良時代から栽培されてきました。当時、高僧行基が甲斐国内を遍歴の途中、薬効のある甲州ぶどうの栽培方法を村人に伝えたと言われています。

この頃は遣唐使の往来が盛んで、中国の文化が多く導入されましたが、ぶどう栽培、ぶどう酒製造の導入もその一つです。甲州ぶどうの分類はヨーロッパ種の東洋系に属しており、明らかに山ぶどうや、デラウェアや巨峰のようなアメリカ系ぶどうとは異なり、中国から入ってきたことを物語っています。

甲州ぶどうがワイン用として本格的に登場するのは、昭和初期になってからです。

それ以前は、主として生食用として栽培されていました。芭蕉の句、『勝沼や馬子も葡萄を食ひながら』はよく知られています。

甲州ぶどうのワインは戦後、醸造技術や品質管理の向上もあり、和食が海外で認められるようになるのに比例して、甲州種特有のやや渋味を帯びた呈味と爽やかな香り、ほのかな酸味を持ったフレッシュでフルーティーなワインは世界的に脚光を浴びるようになりました。近年甲州種のワインはこの良さが認められ、本場の欧州に輸出されるようになりました。

特に和食特有の脂肪分の少ない、懐石料理等とのマッチングは最高です。甲州種ワインは、和食料理を引き立て、ワインが表に出ない取り合わせは、まさに薄化粧をした奥ゆかしい日本女性に例えられます。

ヨーロッパのワインには無い山梨特有の甲州種ワインは、前出の料理の他、鮎、海産物料理、天ぷらにも良く合うので益々広まるものと思われます。

ワインはその国、地域で育んだ食文化の一つであり、その地域の食物と良くマッチした飲み物です。そういう意味で、甲州種ワインも日本の食文化の一員を成しており、これからも米の文化（清酒）と共に新しい文化を構築していくものと考えられます。

さて、山梨地域委員会ですが地元一般社団法人の協会があり18社が加盟しております。3社がJCCA正会員、5社が関東支部地域研究員、広域業者が6社 計14社で地域委員会を構成しております。従いまして、委員会活動は地元協会と共同開催することが多く成功を収めております。山梨の特色と自負しております。

理事・山梨地域委員長 山寺健二（株式会社サンポー代表取締役）



■ 甲州ぶどう(本ぶどう)

編集後記

- ◇大日影トンネルの前に立つ。奥からは、良く冷やされた風が駆け抜け、少し肌寒くもあり清々しくもある。向こう側への期待と恐れを胸に、一步を踏み出す。美味しいぶどうとワインが待っているといいな。（浅野）
- ◇四方を山で囲まれている。今号の特集の取材で訪れた山梨県の印象である。そこから、山々に囲まれているという安心感と、この地の人々が抱く山に対する畏敬の念を少し理解することができた。（遠藤）
- ◇公共事業費削減の中、時勢に流されずに、技術的に高いものを提供するために努力されていることが改めて分かり、彼らの存在がコンサル業界の宝であり、伝統の力となっていくものと確信しました。（若松）
- ◇今回は山梨の特集で、最初に山梨県庁を訪れた。そこでいろいろお話を伺ったが、これまで自分が知らなかった山梨の魅力も含めて、山梨再発見の旅であった。特に、都会暮らしの私には、二地域居住には興味が沸いた。（稲田）
- ◇山梨県企画部リニア交通課の方には不確定な部分がありデリケートな時期にもかかわらずリニアの特集に寄稿して頂き感謝しております。時速500km、東京一名古屋間が40分、東京ー山梨間は15分位かな。近い、すごすぎる。（加納）
- ◇今回は2回目の担当なので慣れたものと思いきや、トラブルや自身のスランプに見舞われ、編集の難しさを思い知りました。その分、思い入れもひとしおです。（佐藤）
- ◇大日影トンネルの取材を通じて知った「勝沼フットパス」。さながらまち全体をミニテーマパークに見立てて地元の観光資産を上手に活用しており、その新鮮な発想に敬意を感じずにはいられませんでした。（趙）
- ◇早川町を訪れ、農山村の暮らしのほんの一端ですが触れることができました。農山村の様々な課題や取り巻く環境・社会状況に色々と考えさせられ、自分の生活を見つめ直す良い機会になったと思います。（荻島）

【グローバル関東 制作者】

広報委員会

委員長	浅野 泰弘	セントラルコンサルタント(株)	委員	佐藤 真理子	(株)オリエンタルコンサルタンツ
副委員長	遠藤 徹也	大日本コンサルタント(株)	委員	加納 肇	いであ(株)
委員	若松 孝至	(株)建設環境研究所	委員	趙 学龍	八千代エンジニアリング(株)
委員	稲田 栄作	東京コンサルタンツ(株)	委員	荻島 晃	日本上下水道設計(株)

グローバル関東 Vol.3 January 2010

発行日 平成22年1月1日発行

編集 広報委員会

発行 JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-10 松楠ビル4階

Phone…03-5297-5951 Fax…03-5297-5952 <http://www.jcca-kt.jp>

レイアウト制作印刷 株式会社 大 應

JCCA
関東支部

